



<論文> 霊劇と霊能発動：宗教法人真如苑における

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋庭, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011284

論 文

霊劇と霊能発動

— 宗教法人真如苑における —

秋 庭 裕

小論は、昨年度の『人間関係論集』no.17に掲載した「抜苦代受と霊言発露」と併読していた
 だければ幸いである。また、そこで論じられていることを前提に議論を進めていく。

小論は、真如教えの中核を構成する霊位と相承会座を理解しようとする試みである。

相承会座のもっとも大きな特徴は、「霊劇」が演じられることである^{#1}。霊劇は相承会座にお
 いてのみおこなわれる。霊劇を演じるのは「相承ミーディアム」とよばれる、とくに限定された
 ヒエラルキーの最上層にある霊能者である。その数は真如苑全体でもおよそ30人である。また相
 承ミーディアムは、参座者が霊位を相承できたか否かを判断する。さらに相承ミーディアムのう
 ちでも、歓喜会以上の会座で相承を判断できるものは、わずか五人しかいない^{#2}。

相承会座では、向き合って並んで正座した修行者の前で、相承ミーディアムが霊言をもってド
 ラマを演じる。これが霊劇である。信心を深めたことを認められて、一如教徒は修行者として会
 座に参座することを許されたわけだが、これらの参座者の心のありようを映しだして相承ミーディ
 アムがドラマを演ずるのである。

相談接心や鑑定接心はもちろん、向上接心のような大人数が一堂に会しておこなわれる接心に
 おいても、接心にのぞむ教徒（接心者という）は、結局一対一で霊能者と相対している。霊能者
 は鏡として接心者の心を映しだし、霊言が発せられるという構造は、どの接心にも共通している。
 ここでは霊能者から霊言が発せられ、接心者はそれを受容するというメッセージの流れは、あく
 まで一方向的である。さらに、接心者から霊能者へ問いが発せられて、コミュニケーションが双
 方向的に発展するような状況においても、霊言と接心者の問いは同じレベルに存在しない。なぜ
 なら霊言は、接心者が属する日常世界を越えた、聖なる真如霊界に帰属するからである。

通常の接心では霊能者と接心者が一対一で相対し、メッセージの流れが一方向的であるのにた
 いし、霊劇はよりダイナミックな構造をとる。霊劇では、護法善神や諸霊格を感応したミーディ
 アムが、参座者の心のありようを映しだし、霊言によるドラマが進められていく。つまり霊劇に
 おいて、聖なる霊言に霊言が応えるというディスクールが、はじめて生まれるのである。このディ
 スクールこそ、真如霊界の顕現として、参座者に共有されるリアリティなのである。真如霊界は、

参座者が霊言によって織りなされるドラマを共有することで立ち現れるのである。

ドラマとしての真如霊界のなかで、参座者はそれまでの世界と自己のあり方を解体し、再構築することをシンボリックに経験するのだろう。つまりそれぞれの霊位の相承にあたり、けっして短くない期間を費やした、歩みと取り組みのなかで生じた自己の変容が、霊位の向上として総括されるのであろう。

次に紹介するのは、1998（平成10）年1月22日、総本部でおこなわれた大歓喜会での霊劇である^{#3}。

定刻、慈救のご霊咒のチャイムがご宝前に静かに響きわたると、真如教主さま、摂受院さま、従われる両童子さまへの感謝のまことを込めて読経唱和。指導の教師は参座者の菩提心をさらに高めるため、覚醒の言葉を発した。

指導教師「今から六十二年前に、真如双親さまは寒三十日の修行に入られ、衆生済度の道開きのため御身を削る厳行に打ち込まれました。その尊き寒修行のときに、大歓喜会に参座させていただいている皆さんは、双親さまのご修行に比べたならば、万分の一にも満たない修行で、こうして尊い法を受け継がせていただいている。そのように思惟したならば、ありがたいというよりも、申し訳ないという気持ちが一層、深まっていくのではないのでしょうか。

自らの仏性だけでなく、多くの方の仏性を磨きだし、真如双親さまの救いの霊線につないでいく。それが菩薩から大菩薩^{#4}へ転生していく道ではないのでしょうか。み親が迎られたその大きな道を目指すのであるなら、ただの勇猛心ではなく大勇猛心をもって困難に取り組んでいかななくてはなりません。

真澄寺の建立^{#5}に伴う真如双親さまのご苦勞、それは並大抵のものではありませんでした。双親さまに対して、自分の我を通そうとしたり、俗信を教えに持ち込もうとした人たちが大勢いたわけです。けれどもみ親は、そうした方々を排除なされず、その方々と一緒に修行していられました。よく教主さまは『その人が救われようと救われまいと最後まで救いの手を差し伸べていくのが、宗教家の道なのだ』と教えて下さいました。

・・・・・・・・・・中略・・・・・・・・・・」

一言一言、噛みしめるように語る指導教師の言葉は、参座者の心の中に染みわたり、会座の霊気は一層の浄まりを見せていく。ここで霊能者が、伝燈密流につながる護身神法を結誦、速やかに入神すると、参座者一人ひとりの心境を霊劇によって展開していった。

○

指導霊A「寒修行という和合衆が最も浄まった、しかも開基六十年のこのときに、祈りが深まらなければ、他に深まる機会はないでしょうから、必死の思いで立ち合わせていただいているん

ですよ。」

指導霊B「私も開基六十年のこの寒修行のときに、会座に立ち合わせていただき、ありがたいと思うのですが、でも心の底から喜びになっているかといいますと、なにか大変だなという気持ちが沸々と湧いてくるんです。私の心の中でわだかまっているものを浄めて、心の底から感謝と喜びで立ち合わせていただけるようになったとき相承かなと思うんですが、どうやってこのわだかまを浄めていこうかと、祈っているんですよ。」

指導霊C「寒修行に一生懸命取り組んでいるときは本当に尊いな、ありがたいなど実感できるんですが、ふと寒修行が終わると、またいろいろ面倒な取り組みが待っているなど心配になるんです。なにをいただいてもすべて修行で、ありがたいなど、乗り越えていけばいいんですが、そうした心境には今一つなれないんですよ。」

指導霊A「双親さまが正月早々から寒三十日のご修行を始められて今は半分位が終わったところでしょうが、あの頃の双親さまはどうしていらしたんでしょうね。」

指導霊B「心に喜びが無いとか、先を考えると不安になるとか、つい自分事にとらわれてしまうのは真実一人の救いのため、寒の修行に打ち込まれた真如双親さまに、むけさせていただき祈りが、浅くなっているからではないでしょうか。ただ観念で立教の頃を思い出すだけでなく、原点に帰り、み親の真意を祈りの中から深めていくことが大切だと思います。」

覚醒霊「大菩薩を目指す皆さんなら、真如双親さまが道一すじに発たれた寒修行で、どういう行をしてこられたか、深めていく必要があるのではないのでしょうか。

・・・・・・・・中略・・・・・・・・

やらせていただきます、尊い寒修行だから、とにかくやらせていただきますと祈っても、具体的に何をどう行うのか、曖昧なものがあるのですよ。その祈りを自らの立願にきちんと結びつけ、どのように大乘利他の菩薩行を実践し、貫いていくか、心に定めていただきたいと思います。またその覚悟を定めていく大切さを、皆さんの後から続いて来ている所属や部会の方に伝導していくのですよ。

うーん。まだ誰かが良いようにしてくれる、という思いが感じられてきます。そのような受け身の姿勢ではなく、もっと前向きに、自らが^{なご}楽うてさせていただこうという心が大切ですよ。・・・

・中略・・・」

霊劇を通して参座者の祈りが未だ観念にとどまっている状況をつぶさにみた指導の教師は、さらに覚醒を促すべく言葉を続けた。

・・・・・・・・中略・・・・・・・・

この尊い時期にこそ相承させていただこうという、参座者の真剣な気迫が会座に満ちていくなか、護法神は一人の女性教徒のところで、もう一步、真剣に祈りを深めていくように促した。

護法神「やらせていただくという、燃え上がりは感じますが、なにか胸から上の燃え上がりですね。・・・中略・・・

濟摂、摂受、抜苦代受の尊きみ力^{#6}のなかに生かされていることを思うとき、お応えせずにはいられない、歩まずにはいられないという、そうした感謝に燃え上がった実践が他を動かし、分からざるを分からせていく原動力になっていくのですよ。やらなければいけない、という義務感では、喜びは伝えられません。しっかり実践し祈りを本物にしていくことです。」

つづいて護法神は関西から参座する女性教徒の前で絶対帰依の覚悟を固めていく大切さを諭した。

護法神「精進をしていて、常識では考えられない不思議や抜苦代受のお力をいただくと、本当にありがたい、もったいないと悟ることができるあなたですが、少し困難なこととか障害が、目の前に現れてきますと、なぜこんなこんなことになってしまったのか、という迷いと執われが出てきてしまいますね。・・・」

厳しくも温かい叱咤の言葉を深め参座者は心の立て替えに努めていく。そのとき九州の教区から帰る女性教徒の前に相承ミーディアムが引かれるように進んだ。

相承ミーディアム「拝、そう拝。刹那的に燃え上がっても、すぐに萎んでしまうようであったならば当てにされるお仕え人とは言えませんよ。どのような歩みがたい条件下に置かれることがあっても、自らがその状況をリブライ^{#7}として、これは真如双親さまのみ心を刻ませていただく修行なんだ、多くの方々の心を知るための修行なんだと受けとめていくことです。

私なんかできませんと、小さな器のなかに閉じこもってしまうのではなく、私が努力すれば、これだけのお仕えができるという自信と誇りをもって、今まで行ったことがないほどの努力を喜びの心で三つの歩みの実践に示していく。

その燃え上がる心が、わからざるをわからせ、帰らざるを帰らせて自らの信心を高めていくのですから、経のなかでも教区でも、当てにされるお仕え人としての姿勢を今このときにしっかりと示していくことが大切ですよ。吽拝。」

開基六十年の佳節に精いっぱい精進で、み親のご期待にお応えさせていただこうと、全身全霊をもって祈る福岡一部町村君子さんの頭上に相承の輪環が飾られた。・・・後略・・・

真如霊界が現前化する霊劇の特質をもう少し考えてみよう。「劇」をメタファーとして用いることが、相承会座にどんな特質を与えるのだろうか。相承会座において参座者は、真如霊界を目の当たりに「見る」ことができるはずだ。そこには「いま、ここに」存在しないような対象、あるいはこの世に一度も存在したことの無い対象、つまり「不在のあるいは非在の対象」を生み出す力が備わっている^{#8}。

相承会座では「不在の、非在の対象」が、参座者に占有できるような仕方でくっきりとリアル

に現出される。しかし、その対象はもともと「不在、非在」なのだから、参座者の面前に「存在」するとはいえない。存在するのは、あきらかにある対象が存在するという「信憑」である。「不在、非在の対象」を「見る」ために、厚東洋輔そしてサルトルにならえば「のりうつる」ために、あるいは「憑く」ために、仲立ちするものが必要なのである。「不在、非在の対象」を徒手空拳で眼前に呼び起こすことはできない。「不在、非在の対象」の現前化を媒介するための「依り代」として、ドラマというメタファーが用いられているのである。

メタファーとは、簡単にいってしまえば、既知のもので未知のものを理解しようとする方法である。優れたメタファーは、それまで見過ごされてきた現実をつかむことができる。それは、これまで隠されてきた現実の意味を開示すること、あるいは私たちを無限に豊かな可能性をもつ領野としての「現実」にふれさせることができるのである。

では、なぜドラマが採られるのであろうか。ドラマのもっとも一般的な主題は、葛藤とその解決である。葛藤は個人の内部にも生じ、また個人間にも生ずるが、全体社会レベルの秩序原理にかかわる葛藤を扱うものとしては「社会劇 social drama」がある。祝祭や儀礼のなかに現われるこの種のドラマをとおして、社会あるいは秩序の「あるべき姿」が象徴的に再構築されるのである⁴⁹。

相承会座においては、霊劇の始まりとともに、参座者一人ひとりの悩みや葛藤がまず提示され可視化される。つぎに、可視化された悩みや葛藤という各人の課題が、教えというより大きな文脈のなかに置かれる。そうすると、じつはそれが一人だけのものでなかったことが「発見」され、参座者全体で共有される。さらにつぎの局面で、おのおのはその課題にどう取り組んできたかが総括され、到達点と不足点が明確に示される。そしておそらく、相承ミーディアムは、その課題を真に克服できる参座者のみを見極め相承に導くのである。

ここには葛藤とその解決、つまり「試練」「探求」「闘争」というドラマや物語でもっとも愛好される三つのカテゴリーが頻出する。「試練」「探求」「闘争」はいずれも物語の中間部において、物語の筋を発端から結末へぐいぐいと引っ張っていく「物語論的」とでも言いうる行為範疇である。と同時に「試練」「探求」「闘争」は、必然的に複数の他者との厳しい相互行為をまぬがれない、つまり「社会的」行為の典型であることに注意を払わなければならない。だから、葛藤とその解決を主題とするドラマは、人生をまさに劇的に理解するモデルとしてじつに説得力に富んでいるのである。

ドラマでは、主人公は複数の登場人物の一人にすぎず、当初からその絶対性は奪われている。主人公は「私」と同等な重みをもった他者と、緊迫した相互行為を繰り広げなくてはならない。そこでは人びとが相互に解釈しあうこと、あるいはコミュニケーションをとることが決定的に重要である。ドラマで描かれるのは、複数の行為連鎖が交錯する、社会的に広がりをもった状況で

ある。「私」を登場人物の一人としてながめること、ともすれば「私」のみに閉塞しがちな視点を開いていくこと、これらはドラマによってよく達成されることである¹¹⁰。

さらに、霊劇が霊言によって織りなされるドラマであることをもう一度思いおこせば、真如教えのなかで相承会座がしめる決定的な重要性を、誤ることなく評価することができるだろう。つまり、聖なる霊言に、やはり聖なる霊言が答えるという、どこまでも深く内的透明性に満たされたディスクールにおいてこそ、おごそかにして厳粛な、と同時に生き活きと生気にさえあふれて、真如霊界というリアリティが現出するのである。相承会座では霊劇を依り代として、真如霊界が憑く。ここで生じていることは、相承会座において真如霊界が現前化するというより、霊劇を仲立ちにして、相承会座は、もはや真如霊界の「なかに」「ある」。「霊言」による「ドラマ」こそ、教えや祈り、あるいは世界や真理を示すのに、二重の意味でふさわしい形式なのである。（この議論は「抜苦代受と霊言発露」を参照のこと。）

信徒でない私たちは教えを内部から見ることはできない。だから相承会座という、真如教えのまさに最深部のリアリティを内側から語る文体など、まったく私たちが用いることのできないものだ。したがってここまで述べたような議論も、教えの深奥から会座のリアリティを語ることのできる教徒にとっては、見当違いもはなはだしいだろう。しかし、教えの外にあって教えを理解しようと意図するものには、有効性のありそうなアナロジーをてこにして理解を試みることは、他に代替できない戦略である。

この問題をもう少し補足しておこう。宗教研究において「内在的理解」を重視するにせよ「体験的理解」を重視するにせよ、じつは論点は「理解」の問題というより「説明」の問題にあるのである。

仮に、私たち研究者も入信し、一如教徒となり歩むとする。霊位向上に邁進するとする。そして今日では、霊能相承がかなったとしても平均で二十年近い年月を要するわけだが、霊能を開くことができたとする。そのとき研究者が見、聞き、経験したすべてを「客観的」「科学的」に語る事ができれば問題は生じない。しかし、霊能相承という宗教的奥義に属するリアリティをそのままに、研究者が依拠する学問の流儀で、つまり世俗の言語で語ることは、おそらく不可能である。聖なる言語でなければ、聖なるリアリティをそのままに再現できないのだ。このように霊能を相承し身をもって理解することと、霊能を説明することとは、別種の困難に直面することになるわけだ。

本来、歩んでみなければ分からない教えを、教えを知らない外に向かって語るためには「依り代」が必要なのである。モデルやメタファーやアナロジー、あるいは調査のなかで導きだした仮説が（上手くすれば）その役を果たすことができる。それによって私たちは教えを内部から外部へと「翻訳」することを試みているわけである¹¹¹。どこまで到達できたかについては読み手の評

価をまつしかないが、本研究はそういう試みの一つのなのである。

さて霊能相承会座のもようも紹介しておこう。つまり霊能発動修行での霊劇である。近年『歓喜世界』の「天音」に収録された相承会座の霊劇のうち、霊能相承会座での霊劇はごく少ない。とはいっても相承会座が霊位ごとに大きく異なるわけではない。基本形は同一であるとみるべきであろう。しかし、従来霊能発動修行が紹介されたことはほとんどないのでここでとりあげておこう。

紹介するのは1998（平成10）年3月26日に総本部でおこなわれた霊能発動修行である¹²。この年は真澄寺開基六〇年にあたり、教苑をあげてさまざまな新たな取り組みが打ちだされていた。またこの日は、教主真乗の誕生日を祝しておこなわれる「真如教主常住祭」を二日後にひかえ、大祭の準備がちゃくちゃくとすすめられていた。

定刻を迎え、慈教のご霊咒のチャイムが場内に鳴り響くと、参座者は皆、威儀を正して合掌した。指導教師は教徒の菩提心を高めるため、覚醒の言葉を発した。

「霊能者にならせていただくということ、それには感謝が基盤だと思います。どんなことにも感謝がもてますか。感謝で受けとめられますか。感謝の心で尽くし切っていくことができるでしょうか。

いまは真如教主常住祭と名前が改まりましたけれども、私たちは尽きせぬ感謝というものを大祭に向けていかなければならないと思います。真如教主さまのお誕生があればこそみ教えがあり、それによって私たちは生かされています。……」

……………略……………

指導霊A「こうして尊い純陀品とご霊咒の音調を聞かせていただいて、真如教主さまと摂受院さまが私たちの側にいてくださり、慈悲のみ心を注がれているという常住の理を気づかせていただいておりますが、ふと現実に戻ると思うようにならないことばかりで、自分の足りなさ、汚さをいやというほど見せつけられてしまうのです。……」

指導霊B「そうですね。私は先輩方からご注意をいただいたとき、つい今までの自分の知識や常識を中心に考えてしまって、なかなか祈りで受けとめることができないんですよ。だから、言われることはもっともですが、自分はあるもこれもやっていますから、という心が出てきてしまうのです。……」

指導霊C「一通りのことは全部わかっている。所属¹³にも『あなたが土台になっていくのよ』とか教化ができているのですが、では普段、自分自身がどれだけ、自己を滅して土台となって、みんなのために取り組んでいるでしょうか。……」

……………略……………

覚醒霊「聖なるものに依って立つ動かざる信心が基盤であったならば、自らの欠点や因縁の垢を浄めてくださる言葉は、すべてありがたく、合掌の心で受けとめていくことができるはずですよ。

そして、尊い教えをいただいても、いろいろな事象を示されても本当の気づきが生まれず、真の感謝が湧き起こってこないということは、真如双親さまが説き示される大乘利他の教えをまだまだ身に行じていく実践が足りないということではないでしょうか。

・・・・・・・・略・・・・・・・・

最初に多くの海外教徒の中で、ニューヨークより帰苑した男性にミーディアムは霊言を与えた。

「さあ、上求菩提に真剣に取り組んでいくことですよ。自分ではよくわかっているつもりでも、必ず二、三十パーセントは分からないものを持っているものです。精進の道は、常にその未解の部分を学ばせていただくとう上求菩提し、努力していくことなのです。・・・」

・・・・・・・・略・・・・・・・・

個々のご霊言の指導によって、祈りの基盤がしだいに定められていくなかに、苑主、真如継主¹⁴さまがご宝前にお越しになられた。一人ひとりの祈りの姿を継主さまはじーっとご覧になりながら、やがてマイクを手に取りられた。

「はい、霊能者にならせていただくということは、救いの源である真如双親さま、両童子さまのみ心に、一人でも多くの人を繋いでいくためなのです。真如み教えの中心に、自らが無になり絶対帰依できてこそ、常住のみ許にしっかり繋がっていただけるのではないのでしょうか。皆さんが繋がれているからこそ、多くの方を一如の本道に結んでいくことができるのです。

・・・・・・・・略・・・・・・・・

やればもっとできる。祈ればもっと開かれていく。祈りが深ければ自らの心は向上していきます。掘り下げていけばいくほど、自らの仏性は磨かれていきます。さあ霊能を開いていくのに、今日こそはすべてを捨てきて、無にして真如双親さまに喜んでいただくの一心で深めてください。

はい、これから慈救のご霊咒¹⁵をお唱えしていきます。双親さま、両童子さまは、何よりも今日立ち会っている方が、霊能を開いてほしいと願われていますよ。その願いにお応えしていくべく、真剣に祈りを深めてください。」

真如継主さまのご指導によって教徒の菩提心は一段と高まって、会座の霊気は清らかに澄み切っていた。そしてミーディアムによって唱和されるご霊咒の音調が、高く低く流れるなかに、ご宝前は霊妙のみ力に包まれていった。

ここで参座者は、真如霊界より発せられる救いの波動に自らの身をゆだねるなかに、次々と霊動を示していった。あるものは合掌した手を高く突き上げ、あるものは両手を開いて虚空を抱えている。なかには頭上でスケールを切っている者もあったが、一方では硬直してぴくりとも動か

ぬものもいた。

・・・・・・・・略・・・・・・・・

重ねて慈救のご霊咒が唱和されるなか、護法神を感応するミーディアムは会座をまわりながら、一人ひとりの状況を霊能をもって調べていく。そして祈りの深い教徒の前では霊呼吸を送り、真のお仕え人の境涯へと導いていった。

真如継主さまの再度にわたるご指導と、ご霊咒にこもる慈救のみ力によって、会座の霊気は高く浄められ、あたかも真如曼荼羅世界が応現したかのようであった。ときおり、ミーディアムの発する霊呼吸の音が道場内に響いていく。参座者は、全身全霊の祈りをもって、そこに込められた真如双親さま、両童子さまのお命を受けとめようと努力していた。

そのとき護法善神を感応するミーディアムが、海外で精進している女性教徒の前に、引き寄せられるように進んだ。ロビーの片隅で満面に歓びを浮かべ、歓喜の三昧境に入っているその教徒に霊呼吸を送ると、さらに深い絶対帰依の祈りをあらわしていった。

その状況をつぶさにご覧になられていた真如継主さまは軽くうなずいて、女性教徒と対座された。

「これより真如双親さま、両童子さまの尊いお命が込められている霊呼吸^{霊6}を送ります。祈りのなかに魂で受けとめていくのですよ。」継主さまは教徒の覚悟を不動のものとするべくお言葉を与えられ、一度、二度、三度と霊呼吸を送られた。尊厳に満ちながらも、温かさあふれるお言葉に引き上げられた教徒は、見事に霊呼吸を受けとめて完全感応の妙を示し、ここに台湾一部安西経、安西福美さんは天霊系霊能の相承をみた。

ミーディアムの誕生によって、霊気はますます清浄なものとなり相承の気運は最高潮へと達した。ミーディアムは、一人も多くの人を霊能境へと導かんと、感応の深まりを見せている教徒に、力強く、次々と霊呼吸を与えていった。

会座では、引き上げようとする真如霊界と、開発させていただこうとする教徒が一つになっての、真剣な熱禱が繰り広げられていたが、そうしたなか中京地区で精進している男性教徒の前に、ミーディアムは引きつけられていった。

黙々とひたすら祈り続ける男性に、護法神感応のミーディアムは霊呼吸を送ると、わずかに霊動をあらわして、一層の感応の深まりを見せていく。側でご覧になられていた真如継主さまは、ゆっくりと男性教徒の前に座られ、息を整えられると、一気に霊呼吸を送られた。この後、継主さまは何度も何度も、繰り返し霊呼吸を送り続けられた。それは男性教徒の覚悟が本物かどうか、厳しく調べられているようであったが、正法護持の不動心はまさに堅く、中京本部の事務局でお仕えしている東京九部鈴木経、松山泰弘さんは、地霊系霊能の受け継ぎを証した。

・・・・・・・・後略・・・・・・・・

霊能と霊能者が天霊系と地霊系に二分されることはすでに述べた¹⁷。天霊系であるか地霊系であるかによって、霊能者として果たす役割に機能的な違いはないという。ただ霊言を発するさいに霊界からのメッセージを、天霊系はどちらかというと視覚的なヴィジョンが勝ったものとして、地霊系はどちらかという直感的にインスピレーションが勝ったものとして受け取るという傾向がみられるという。

パーソナリティの違いとして、天霊地霊の類別は対照的であるととらえられている。天霊は「なんでも理論で知る頭の人」で分析的、理知的な傾向の強い人であり、これにたいし地霊は「足であゆんで納得する実践的な人」であって、直感的で情熱的な傾向の強い人である。ここでも真乗は、二種の霊能はいわば相補的な関係にあるのだから、互いの尊敬こそが不可欠であると、自分と友司を例にあげてくりかえし強調している¹⁸。

とはいえ、天霊であるか地霊であるかは、霊能を相承しないかぎり確かめようのないことである。あるいは、霊能相承において初めて問題となることがらである。それまで天霊的な資質であると思われていた人が、いざ霊能相承してみると地霊系であったり、またその逆であったりすることがしばしばみられるという。では、そもそも天霊であるか地霊であるかは、どのように識別されるのだろうか。さきに引用した「天音」に「地霊系霊能の受け継ぎを証した」と表現されているが、受け継ぎはどのように証せられるのだろうか。

祈りが十分な深さに達した参座者にのみ、まずは護法神を感応するミーディウムから霊呼吸が送られる。感応する護法神に応じて何段階かの霊呼吸が送られるというが、最終的に継主によって送られる霊呼吸を受けとめることで「完成霊能」の発動がなされる¹⁹。このようにして新たに誕生した霊能者が、あなたは天霊であるか地霊であるかと問われると、本人の意志のあずかり知らぬうちに手が引かれ身体が動き、それぞれ二種の霊能をシンボリックにあらわす固有のポーズをとるといふ。思わずググッと身体が動いてしまうので自分でも驚いてしまうのだという。

霊能相承会座は、真如教えのまさに最奥義に属するから、部外者は誰も参観を許されたことはないし、これからも許されることはないだろう。また、たとえ真如教徒であったとしても、霊能相承会座に立ち会うことのできる数は、信者全体からみればきわめて限定されている。したがって私たちはここでもアナロジーやメタファーを駆使して、調査やインタビューで知りえたことを再構成しながら論じているわけである。

ここまで「霊能相承」という言葉と、「霊能発動」という言葉を互換的に用いてきた。「霊能相承」という表現もちろん誤りではないが、より正しくは「霊能発動」と言うべきであるという。少し以前は「霊能開発」という言いまわしも、もっとひんぱんに用いられたようだ。いずれにしても、霊能以外の霊位については「発動」するとか「開発」するとは、けっして言わないことも注意しなければならない。では、なぜ霊能のみ「発動」「開発」であるのだろうか。

内的透明性に満たされた霊言が織りなす霊劇のなかで、ドラマとしての真如霊界が現出する。活き活きとじつにリアルな真如霊界のなかで、祈られる無数の祈りが、全身全霊を込め、真に深められ、「通る」とき、初めて、まずは護法善神から、最後に継主によって霊呼吸が吹き込められる。霊呼吸は、元来その人のうちに備わっていた、しかし自分自身も知らなかった深層に、深く深く蔵されていた霊能に命を吹き込む。真乗は、霊能開発とは「真如なるものを伝承することで、自分の包蔵している仏性を開くこと」²²⁰であると述べている。

そもそもこのように霊能が開発可能なのは、『涅槃経』の眼目である「一切衆生悉有仏性」という主張と対応しているからであろう。「一切衆生悉有仏性」というフレーズに、『涅槃経』のエッセンスが凝縮されているのであるが、霊能発動との関連のなかでかいつまんで論じておこう。

「仏性」とは、大乘仏教的な教えの結論として導きだされたのであった。大乘仏教は誰もが仏と同じさとりを開くことができると説くであるが、なぜ誰でもがさとりを開くことができるのか。それは誰もが仏と同じ性質を備えているからだということになる。しかしすべての衆生に仏性はあるのだけれど、誰もあることを知らない。知っているのは仏だけだ。本来もっているのに、貪瞋痴の三毒の煩惱におおわれて隠されてしまい、みんなは宝物に気づかないでいる。だから、一切の衆生が宝物であるような仏性をもっていることをよく知っているお釈迦さまにお会いして、真実の教えを聞くことが大事であると、『涅槃経』には説かれていたのであった²²¹。

真乗は常日ごろ、真如苑における霊能は、「霊能者を生み出す霊能であり」「霊能は誰でもが開発できる」²²²と強調していたのであった。これは「一切衆生悉有仏性」という『涅槃経』の教えの結論を、じつに簡明に示したものであったわけだ。このように、各人が接心修行を重ねることで、本来備えている霊性を開発し、霊能を発動することができることが示されているのである。

では、霊能発動修行のなかで、霊能を発動しうる状態に達したことは、何によってみきわめられるのだろうか。先に引用した『天音』のなかにうかがうことができるように、着目すべきキーワードはおそらく「祈り」である。第一に「祈り」という言葉が頻出することに注意しよう。次に「祈ればもっと開かれていく。祈りが深ければ自らの心は向上していきます。」と、祈りを深めることが求められているが、私たちは、ここで述べられているようなリアリティを、どのように理解したらよいのであろうか。

「全身全霊の祈り」や「絶対帰依の祈り」をもって、祈りを十分に深めることができた参座者のみ、霊呼吸の送霊を受けることができる。十分に祈りを深めることができた状態は、祈りが「通る」という表現がよく用いられる。祈りが通ることが、霊能発動修行でも最終段階近くでの大関門である。また逆に、「祈りが通らなかった」という言い回しは、霊能もふくむ各霊位の相承会座で、相承がかなわなかったという意味とほとんど同義で用いられる。

それでは、「祈りが通る」とは、どのような状態なのであろうか。「祈りが通る」とき、霊能発

動修行に立ち会う参座者は、会座のなかで、あるいは相承ミーディアムとのあいだで、どのような状態にあるのだろうか。

いったい、祈りが「通る」のであれば、それはどこからどこへ通るのか。おそらく、ひとつには、この世という現象界から真如霊界へ通るということであろう。つまり、霊界にある教導院と真導院の両童子に、祈りが届くこととして理解されるだろう。そして、同様に重要なのは、そういう参座者の祈りが通っていることが、相承ミーディアムにも「通る」こと。ここに、このとき、霊能発動修行の会座のなかに、祈りを共有するものたちの間で、真如霊界はまさに湧出する。

相承ミーディアムは、祈りが通った参座者をみきわめ霊呼吸を送りはじめるが、このとき相承ミーディアムと参座者は、じつに強固にひとつのリアリティを共有している。強固な間主観性に結ばれているとあってよい。霊劇の進む会座のなかで、祈りの通った参座者は、それまでに経験したことない深さで、他と我が結ばれるのを経験する。世界と私の結びつき、あるいは、真如苑的な表現を用いれば、さらに顕幽一如を感得するといってもよい。

祈りが通るとき、我は自明な存在としての他者を見いだす。他者もまた、私と同様な仕方での世界を経験し、私の世界と同様に構造化された、同じ時間と空間の「今、ここ」にあること、を見いだすのである。こうした理解のなかで、他と我の間に相互理解と共通のコミュニケーション環境が成立する。共通のコミュニケーション環境に参加している人びとは、対象としてではなく、同じ主体として結ばれている。ここでは他と我は、個人個人の間の視界の相違を、第一に観点の互換性を理念化することで、第二に有意味体系の一致を理念化することで克服しているのである²²³。

観点の互換性の理念化とは、以下のようにとらえることができる。他者の「ここ」が私の「ここ」になるように場所を交替すれば、私は他者が今対象との間にもっているのと同じ距離をその対象との間にもち、他者が今見ているのと同じ類型性において、その対象を見ることができるだろう。そして、今他者の手の届く範囲にあるのと同じ対象を、私の手の届く範囲にもってこることができるだろう。ということを私は自明と考えている—そして他者もそうだと仮定している、ということ。

次に、有意味体系の一致の理念化とは、私と他者の独自な生活史的状況に由来する視界の相違は、双方の手もちの目的にとって有意なものではないということ。また私と他者、つまり「われわれ」は、双方が同じ仕方で、または少なくとも「経験的には同じ」仕方で、実際にまたは潜在的に、共通な対象およびそれらの特徴を選び出し、解釈していると仮定しているということ—また他者もそうだと仮定している、ということ。

会座において祈りが通るとき、参座者はこのようにして視界の相互性^{パースペクティブ}に結ばれ、真如霊界という共通のコミュニケーション環境に参加している。そして、この間主観的真如霊界は、真如教え

にきわめて重要な特色をあたえるだろう。相承会座という教えの深奥部で真如霊界というリアリティは、間主観的な相互理解のなかで立ち顕れる。このことが、ある意味でゆるやかでしなやかな教えを生み出しているだろう。

このように霊能発動が、間主観的真如霊界に結ばれることであると考えると、私たちは霊能と霊能者に対する理解を一步進めることができるだろう。つまり、霊能はいったん取得されたならば、自動的に生涯保持し続けられる、資格のようなものではまったくないことである。霊能の開発は、「才能」や「能力」にもとづくものではない。すでに述べたように、真乗はそれを「仏性」に結びつけて根拠づけている。そのような霊能は、ある種状態であり、維持し続けるような努力が不断に要求されるのである。

まこと基礎行以来、霊能者は鏡にたとえられていれる。その霊能鏡を曇らせないように修行し続けることが、途切れることなく求められているのである。霊能を発動し霊能者となった後も、最低でも月一回は接心者として接心に参座することが課せられている。また「苑内接心」への参座も月一回の割合で求められている。「苑内接心」は、霊能者のみが参加し互いに接心を取りあう。これらの接心に参座することで、霊能者は霊能鏡を曇らせないこと、つまり、真如霊界という共通のコミュニケーション環境に参加し、視界の相互性に結ばれることを確保しているのである。

霊能者として接心を取り、そして接心者として接心会座に参座し、苑内接心に参座する。霊能者は常に真如霊界とともにあるといっても過言でないだろう。このことから真如苑の霊能と霊能者は、真如教えという文脈を離れては意味をもたないことがよく理解できるだろう。まったくの比喩表現であるが、真如教えというネットワーク環境のなかで、真如霊界というサーバに結ばれて、霊能者ははじめて機能すると言うことができないだろうか。

ときおり、真如苑の霊能者が分派独立活動を行うことがないのはなぜかということが問題になるが、上述の事情をふまえるとよく理解できるだろう。真如苑の霊能者は、真如教えという文脈を離れて、単独で自己完結的に発揮すべき能力を、そもそももっていないと考えるべきであろう。

注1 相承会座は非公開である。しかしおりおりの相承会座での霊劇は、『一如の道』や『歓喜世界』に、シナリオのような形式で掲載されている（『歓喜世界』では「天音」と題して）。以前のものから最近のものまで通覧すると、霊劇も徐々に変化している点もうかがえる。登場する護法善神や諸霊格、言葉や論じられるトピックスの抽象度などに変化がある。しかし基本構造にはいっかんして共通点が勝っているだろう。

注2 1999年現在。

注3 「天音」『歓喜世界』194号、11頁～21頁、1998年、引用は一部仮名にしてある。

注4 菩薩から大菩薩へとは、歓喜の霊位から大歓喜の霊位へという意味である。筆者注。

注5 昭和13年に建立された旧真澄寺は、昭和43年に発祥第一精舎の建立にともなって青梅の塩船観

音寺に移築された。それが平成6年、青年会発足四十周年記念事業の一環として、青年部によって真澄寺「復建」（総本部近くに再移築し、往時の姿に復元建築）が発願された。その落慶がこの年の秋に予定されていたのである（「復建」真澄寺落慶法要は11月3日に営まれた）。

- 注6 「抜苦代受」は主として両童子に由来する、「摂受」は主として摂受院に由来する、「^{さいしゅう}済摂」は主として教主に由来する「尊きみ力」であるとされる。筆者注。
- 注7 「リプライ」とは、霊界からシンボリックに示される事象や現象のこと。英語の reply が転訛したとされる。かつては「対応」と称していた（『一如の道』271～273頁、「霊言と対応」の節に「りぶらいは目に示してくれるもの、霊言は霊能で言葉で示して下さるもので、両方とも切っても切れないもの」とある）。リプライは信心を深める糧とすべきものとされる。リプライはじっさいにどのような事象や現象であるかということより、それをリプライととらえる見方や考え方が大事であるといえるようだ。
- 注8 この議論は、厚東洋輔『社会認識と想像力』ハーベスト社、1991年、13頁～23頁を参照した。
- 注9 井上俊「ドラマとしての社会」（井上俊『遊びの社会学』世界思想社、1977年）、ヴィクター・ターナー「社会劇と儀礼のメタファー」（ヴィクター・ターナー『象徴と社会』紀伊国屋書店、1981年）を参照のこと。
- 注10 厚東洋輔、前掲書、263頁～266頁を参照のこと。
- 注11 島蘭進「宗教理解と客観性」とこの論文にたいするコメント、大塚和夫「理解のパラドックス」（いずれも宗教社会学研究会編『いま宗教をどうとらえるか』海鳴社、1992年所収）を参照のこと。
- 注12 「天音」『歓喜世界』195号、1998年、17頁～23頁、引用は一部仮名。
- 注13 真如苑の信者組織では「^{すじ}経」が基礎となる最小単位をつくる。新たな入信者はいずれかの「経」に所属し、「^{すじおや}経親」と親子関係を擬す。経親は制度上のポストで、自分を苑に導いた人が経親でない場合は、その人の経親を自分の経親とする。（この場合導いた人は「導き親」とよばれる。）経親からみた「子」が「所属」である。経親は「家庭集会」を主催するなどして、万端初信の人のケアにあたるなど、信仰の第一線の実質の多くをになっている。経は（平成10年現在）総数3,500ほどに達する。霊能者の多くは経親をかねているが、霊能者の数よりはるかに多い。経親になることを「経立て」というが、経立てにはさまざまな要件を満たしているかどうか厳しく審査される。教義の理解、霊位向上への取り組み、指導者としての人格と力量、所属の教とその所属がじっさいに歩んでいるかどうかなどである。
- 注14 真乗友司夫妻の三女。教主真乗死去後、現在は「^{けいしゅ}継主」として苑を代表する立場にある。
- 注15 「慈救のご霊咒」は、教導院他界のおり、本咒を唱える友司に独特の音調が感応されたという。以来、真如苑ではその調べにしたがって唱和され、救いの威力がこめられている「霊咒」として尊ばれている。
- 注16 「霊呼吸」の送霊は、霊能相承会座においてのみおこなわれる。何段階かあって、最初は護法

善神が、最後は真如継主によって霊呼吸が送られ、霊能が発動する。

注17 「抜苦代受と霊言発露」参照のこと。

注18 『一如の道』92～93頁。

注19 霊能相承の印璽である、最終段階の霊呼吸の送霊は、かつては真乗と友司によって、現在は継主によってのみおこなわれる。

注20 『真如苑アクセツブックシリーズ Vol.4 接心修行』真如苑教学部、1993年、27頁。

注21 仏性については、高崎直道『増補新版 仏性とは何か』法藏館、1997年を参照のこと。

注22 『真如苑アクセツブックシリーズ Vol.2 真如開祖』真如苑教学部、1992年、28～29頁。

注23 アルフレッド・シュッツ 森川眞規雄／浜日出夫訳『現象学的社会学』紀伊国屋書店、1980年、146～175頁。